

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4 私鉄沿線

4-1

2008年3月23日（日曜）午後9時を少し回った頃、銀座四丁目の交差点を紳士然とした白髪まじりの風貌の酔いどれが、人波に押されるようにして渡っていた。

男は三越の前でやおら立ち止まり、ご託宣が下ったかのように振り向きざま改装中の時計塔を見上げると、今、自分の身に何が起こったのか解せない面持ちをしたまま腹部を両手で抱え込むと、道行く人を巻き添えにして倒れ込んでしまった。

意識が遠のく中で、みぞおち辺りの激痛がぶり返してきた。「救急車を呼んだから」と誰かが言ってくれている。男は銀座英國屋仕立てのスーツの内ポケットをまさぐる様にして携帯電話を掴み出すと必死の形相でプッシュボタンにタッチしていたが、すぐにその目には何も映らなくなった。

堀内昌幸は搬送先の虎の門病院の集中治療室で、あえなく五十五歳の生涯を終えた。死因は膵臓がん末期と診断された。

亡くなる日の前日から西麻布にある真紀のマンションで寛いでいた昌幸は、自身の命日となってしまった翌日、真紀お手製のフレンチトーストで brunch をすませてから、東急池上線の池上駅近くのコーポラスの一室にある学生時代からの仲間が土日だけやっている『東京チェスクラブ』へ出かけた。

丁度その日の昼過ぎ、新宿にある『パークハイアット東京』41階の「ピークラウンジ」で知人と合う約束があった真紀の運転するオーディTTクーペで、昌幸は五反田駅まで送ってもらった。

ハザード・ランプを点滅させ停車すると、昌幸は降り際に、ツツとフレンチ・キスを仕掛けた。虚をつかれた真紀は、それでもごく自然に、絡めてくる昌幸の舌を強めに噛んで応えながら、シルバー・レイク・メタリックの車体を発進させた。

ここ十数年、昌幸は商用で上京した際、チェスもインターネットサイト経由で指せる時代になっていたが、生身の勝負をしたくて、何度となく時間をやり繰りしては東京チェスクラブへ顔を出していた。

どういう訳か真紀と親密になってからの昌幸は、池上線に乗る度に我知らず口ずさんでしまう歌の一節があった。

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-2

昌幸が二十三歳で早稲田大学経済学部を卒業する1976年に西島三重子が歌ってヒットした『池上線』のリフレインする最後のサビ部分（池上線が走る町に、あなたは二度と来ないのね、池上線に揺られながら、今日も帰る私なの）のフレーズだった。

昌幸にしてもロッキード事件一色であった時代と重なる位の記憶程度しかなかった流行り歌が、EP盤に針を落としたように再生されることが不可解だった。

出口が一つしかない池上駅を降りて数分歩いた所の公園の傍に、東京チェスクラブの入ったコーポラスがあった。

昌幸がチェスクラブへ着いたのは午後二時過ぎだった。八組が対局できるようにセットされたフロアでは三組が指していた。

学生時代の好敵手で、今はクラブの経営者の山川が、「一時間遅れ……、携帯しようかと思っていたところだ」とむっとした顔で言って、そそくさと一番奥の席へ案内すると、白と黒のポーン(歩兵)を右手と左手に握り隠し、昌幸に手番を選択させた。

「山川さんのソワソワが、こっちにも伝染して、おちおち指してられませんでしたよ」

馴染みの一人が後手番の席に腰かけた昌幸に、含み笑いをしながら言いつけた。

四時間かけて一局を、ドロー(引き分け)で終わると、感想戦も待たないで、「チョット付き合えよ」と山川は昌幸を酒に誘った。

「戸締り、よろしく」と山川は常連に気安く言い置いてから、昌幸の返事も待たないでカーディガンを引っ掛けた。

池上駅裏の小料理屋のカウンターで、昌幸と山川は、焼き鳥を食べながら、日本酒を酌み交わしていた。

近況を伝え合っている最中。「何かあったのか？」と山川は酌をしながら、やおら切り出した。

「うん、何？」「水臭いぞ」

「……、近ごろ池上線に乗ると、西島三重子の歌のフレーズがリフレインしてね」

「リフレイン？」

「なぜか繰り返し口ずさんでいる」

山川はカーディガンのボタンを外して「女将さん、おでん見繕ってちょうだい。それとお銚子二本追加」と頼んでから、「堀内、これか？」と小指を立てた。

「分かるか？」

「定跡、定跡！しかもチェックメイト寸前だな」と言ってほくそ笑むと、美味そうに大根を口に頬張った。

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-3

「そうか……」

あっさり認めた昌幸は女将さんに頼んで、ぐい呑みをコップに変えてもらった。

「東京の女か?」「まあな」「その様子じゃかなりのご執心だな」「分かった風な口をきくな」「やに下がった顔で文句を言うな!」

互いにチェスを指す間合いで、手の内を読み会った。

「その人は、言わばクイーン(縦横斜めに何マスも動ける最強の駒)って存在か?」と山川が勝負手を指した。

「まあ、そんなところだ」と昌幸は力なく笑って見せた。

「そう簡単にリザイン(負けを意思表示)されると打つ手がないな……。幸せ太りってあるが、お前さんは肉布団瘦せてやつだね。口には出さなかったが、頬のコケ加減が気になっていたが、そんなことか!とんだスケベ野郎だ。女将さん、ホテルイカとキビナゴ」とつまみを注文した後に、「支払いはこの男がするから」とコップを手渡す女将に常連らしい冗句を飛ばした。

四本目の徳利がカラになり、冷や酒に変えたのを機に、2ヶ月前にアイスランドで亡くなったポビー・フィッシャー(第十一代チェス世界チャンピオン。アメリカ人として初の快挙)の話題に転じた。

「巨星落つとは、よくも言ったね! 枱目と同じ(チェス盤の枱目は八×八)六十四歳。いかにもポビーらしいな」と、キビナゴを食べながら山川がこぼれ話に転じてくれたので、

「渡井さんはどうしてる?」と昌幸もほっとしたついでに、ポビー・フィッシャーの事実上の妻と言われていた日本チェス協会会長代行の渡井美代子女史の動向を尋ねた。

「いろいろと噂は流れてくるが、本当のところは、私にも分からない。とてつもない男にのみ込まれたことだけは間違いないよ」

「そうか……。君はポビーに会っているし、彼の棋譜にサインまでもらっているからな。私は映像でしか見たことはないが、噂にたがわずエキセントリックな男だという印象しか残ってないな」

「奇人も、日本が満更でもなかったらしい」

「渡井さんも、サクリファイスボン(捨て駒)になってもかまわないとまで公言して、辛抱強く尽くしていたようだし」

「そうそう、羽生善治(将棋界のトップであり、チェスプレイヤーとしても国内レーティング〈実力の点数表〉一位)も、ポビーの支援に奔走したからなあ」

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-4

「ポビーがパスポートの無効を理由に成田で逮捕され、牛久(茨城県南部の市)の収容施設に入れられていた時期なども含めて、バタバタしていたからな。叶うことなら、対戦してみたかったのが羽生の本音だろう」

「ポビーの棋譜に感動して、チェス界のモーツアルトと評したことは、今でも語り草になっている」

「冷静沈着な羽生善治を、あそこまで熱くさせた……魔界に踏み込めるのが天才の特権だとしたら、我々は俗人で良かったんだ」と山川は言ってコップ酒を飲み干すと、女将に一升瓶を持ってこさせた。

つき合い酒のつもりが深酒になっていた。

ポビーを肴にしたせいだろうと、昌幸は自分に言い訳をしていた。

山川はチェス界の近況を絡めた四方山話を熱く語り、珍しく饒舌になっていた。

「ところで、クイーンサクリファイス(ポビーが十三歳の時に指したクイーンを捨て駒にして世紀の一局を制した大胆な戦術)を指したことはあるのか？」と山川が尋ねた。「おや？」と感知した昌幸は、山川の口調が変わったことを聞き逃さなかった。

すでに一升瓶は半分ほど空いてしまっていた。女将さんが、さり気なくチェーサー(口直し用の水)を用意してくれた。

女の話から逸れたことに安堵していた昌幸だったが、不意に変化した山川特有の言い回しにたじろぎながらも、「イメージで指したことはあるが……」と慎重に答えた。

「イメージ？ そうだよ、我々の棋力では実戦には無謀だね」と仕掛けた先から手の内を明かしてしまうほど、山川も酔っていた。

「そろそろ、お開きにするか？ 女将さんお勘定」と支払いを済ませようとする昌幸に「アイカワラズ、オンナニハ、ブキヨウダナ」と

呂律が回らなくなり始めた山川は言った。

急に、みぞおちから左上腹部に激しい痛みを覚えた昌幸は、悟られないようにしてトイレへ行った。

便座に座ったまま腹痛と吐き気を抑えていると、脂汗が額ににじんできて、便器を抱え込んで嘔吐した。(またか……コンチクショー)と呻吟しながら、どうにか落ち着くのを待って、努めて平静を装い、席に戻った。

長い時間が過ぎたような気がして、心配されると思ったが、意外にも山川は女将さんと談笑していたので昌幸はホッとした。

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-5

潮時だと思った昌幸はコップ酒を飲み干すと、「女将さん、おあいそ」と頼んだ。

「ご馳走さま。後はよろしく」と昌幸は釣銭を受け取らないで、「それじゃまた」と山川の肩を叩いて出口に向かう。「クイーンニ、ヨロシク」と背後で声をかける山川に「お互い、いくつになっても棋風は変わらない！」と格子戸に手をかけて振り向いた昌幸は、親しみを込めて言った。

昌幸は小料理屋を出ると、タクシーを拾おうと思ったが、無性に池上線が恋しくて、酩酊加減を春寒にゆだね、真紀に携帯電話をかけた。

「これから電車に乗るので、遅くても10時までには帰えるから」と真紀に伝えた。

「お酒が入っているの？」と声の調子から察した真紀が尋ねた。

「一局指した後に、珍しく誘われたので、軽くのもりが飲みすぎたようだ」

「五反田まで迎えに行きましょうか？」

「ありがとう。そんなに酔ってないから大丈夫だよ」

「わかったわ。じゃ、気をつけて帰ってきてね」と真紀が(きてね)を言い終わらないうちに、「店を開けておいてくれないか？」と遮るので、「え？」と聞き返す真紀に、「休みなのに悪いね。今夜は貸しきりで飲みたいんだ」と昌幸は無理押しをした。

その時昌幸はボビー・フィッシャーが死んだ二ヶ月後に、奇しくも自分が死のうとは夢にも思っていなかった。

肝臓がだいぶ弱っていることは常々忠告されていたが、医者嫌いな昌幸は、血液検査の数値や超音波検査の画像を横目で見ながら、気休め程度に酒量を減らすことで善しとしていた。周りから少し痩せたと気遣われても、適当な返答をしてやり過ぎしたが、さすがに真紀にそう言われた時は、予兆もなく、みぞおちのあたりに、突然激痛を感じることも含めて、吐露してしまおうかと喉まで出かかった言葉をのみ込んだこともあった。

その上に、メインバンクと顧問税理士以外は、妻や妹にすら知られていなかったが、傘下の味噌メーカーの業績不振により、本体の屋台骨が揺らいでいたことも追い打ちをかけていた。

背伸びをして高級クラブ『こはる』へ通う余裕などなかったが、男はドツポにはまり込めばはまり込むほど、素振りすら見せないで女に傾倒していった。